

# たぐみ

## Craftsmanship

特集 民藝の作家と職人の仕事展

第57号

### 世界中が利己的でない 議論をしよう

近年の教育や情報伝達におけるデジタル化の発達は、目を見張るばかりである。なにかにつけてパソコンやスマートフォンで検索し、必要な情報を得ようとする。しかしそこには熟考も思索もなく、伝達される情報そのものの充分な検証もないように思う。

むかし、文字が伝わる前は、稗田阿礼ひえだあのように、クニや氏族の成り立ちや伝承をすべて記憶する特殊な人がいた。古代ローマでもカエサル(ジュリアス・シーザー)の執筆による『ガリア戦記』によると、ガリア(今のフランス)ではギリシア語(西欧共通の文字であった)の習得は貴族のみで、神官には許されなかったという。

それは文字を知り、あるいは記録することによって、本来記憶し続けるべきであった祀りごと(政事や神事)の絶対的聖さが失われるからであった。

しかし何も文字の習得や普及が悪

いわけではない。日本では平安時代には平仮名が生まれ、上層の女性に和歌が広まり、また源氏物語や枕草子などの女流文学もいち早く受け入れられた。

よく知られるように、戦国時代に渡来した西欧の宣教師や、江戸時代後期や明治初年に来日したヨーロッパ人たちが、女性や一般庶民たちへも文字が普及し書物を読みふける姿を見て、本国へ驚嘆の書簡を出している。

ところで大学一年生へのある調査で、年間に一冊の本も読まない学生が四〇%いたという報告があった。読まなくてもよい。問題意識と熟考する習慣さえあるならば、心配なのは思考の回路がデジタル機器のそれにならされてしまっていることにある。

思考の停止は当然議論の回避を生む。真面目な喧嘩をしないのである。世界中がばかばかしい争いししかない。何もかも反省することばかりである。

(志賀直邦)

たくみ特別展

「民藝の作家と職人の仕事展」

会 期 平成二十六年十一月二十九日(土)～十二月八日(月)

十一月三十日(日)、十二月七日(日)は営業いたしません。

会 場 銀座たくみ二階ギャラリィ

営業時間十一時から十九時まで(日曜、最終日は十七時半まで)



1 蛍光灯用九角スタンド(鳥取)

出品品目

● 陶器

金城次郎、島岡達三、合田好道、  
瀧田項一、上田恒次、佐久間藤  
太郎、水野半次郎  
益子ほか日本の民窯  
中国、韓国の陶器など

● 木工

鳥取のスタンド  
小箱、盆ほか漆器各種 こけし  
台湾の竹細工、荒物など

● 雑工

型絵染 鉄器 染織品  
メキシコの皮張椅子など

● 書籍

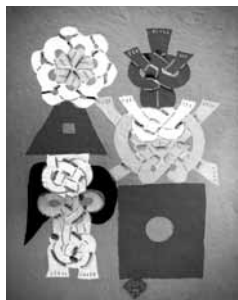
民藝関係雑誌、美術工芸関係図  
書、図録など



6 型絵染 寿 (岡村吉右衛門)



2 象嵌尺皿 (島岡達三)



7 型絵染 福 (岡村吉右衛門)



3 象嵌夫婦湯呑 (島岡達三)



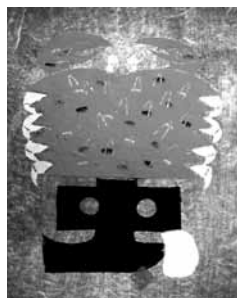
8 十文字七寸皿 (島岡達三)



4 型絵染 瑞 (岡村吉右衛門)



9 箸置 (金城次郎)



5 型絵染 蟹 (岡村吉右衛門)



14 点文汲出 (濱田門窯)



10 練上ぐい呑 (上田恒次)



15 山水絵行灯皿 (瀬戸本業窯)



11 赤絵柳文角蓋物 (濱田篤哉)



16 緑釉手付蚊遣



12 赤絵柳文六角蓋物 (濱田篤哉)



17 蛸唐草印判手一輪差3種



13 後手急須 (濱田門窯)



26 鉄絵徳利 (永坂)



22 皿付たれ入 (金城次郎)



18 地釉象嵌縄文扁壺 (島岡達三)



27 雲助 (苗代川)



23 スリップ湯呑 (藤井佐知)



19 指描湯呑 (島岡達三)



28 流掛花生



24 魚文嘉瓶 (宮城智)



20 搔落徳利 (金城次郎)



29 蓋壺 (龍門司)



25 緑釉野花立 (瀬戸本業窯)



21 イッチン徳利



34 根来三つ足大鉢(夏目有彦)



30 そば猪口(砥部)



35 竹椅子(台湾)



31 銅やかん



36 キンマポール(ミャンマー)



32 ひあげ



37 孔雀(笹野彫)



33 日の丸茶托



46 佐藤重之助 尺二寸 (肘折)



42 新山久志 八寸 (弥次郎)



38 大徳利 (大谷)



47 高橋武蔵 尺 (鳴子)



43 奥山庫治 尺三寸 (肘折)



39 木面



48 左から長谷川健三(津軽)、  
伊豆護(鳴子)、佐藤文男(遠刈田)



44 山谷きよ 尺 (津軽)



40 型絵染 鯉 (岡村吉右衛門)



49 新山久志 えじこ (弥次郎)



45 本多洋 尺 (土湯)



41 イタヤ箕 (東北)

### たくみ歳時記 飯釜と土鍋・石鍋

日本の炊飯器の性能はすばらしく、お米が主食の中国や台湾の人々がお土産に買っていかれることも多いと聞きます。もちろん家電もすばらしいですが、時にはお鍋で自分好みのご飯を炊いてみてはいいかかでしょうか。

ご紹介するのは、昔ながらの杉の



左から南部鉄器飯釜(岩手)、信楽焼織部炊飯釜(滋賀)、山本教行作蓋つき片手土鍋(鳥取)



左から出西窯まんじゅう蒸し(鳥根)、石鍋(韓国)、伊賀雪平鍋(三重)

蓋の岩手県南部鉄器の飯釜や、滋賀県信楽焼の織部炊飯釜、そして鳥取県の山本教行作蓋つき片手土鍋です。いずれも熱の伝わりが均一でむらなく炊き上がり、水加減、火加減でオコゲも自在に作れます。

「はじめチヨロチヨロ中パツパ、赤子泣くとも蓋取るな」という忘れられそうな“呪文”を唱えつつどうぞお試しください。

おかゆ用の三重県伊賀の雪平鍋、

ビビンバ用の韓国石鍋、冷ご飯を蒸すなら島根県出西窯のまんじゅう蒸しも便利です。(H T)

### あとがき

本誌がこのところ年二回の発行で、皆さまのご期待に添えずお詫び申し上げます。小生、昨年一月から協会発行の『民藝』誌の連載「民藝運動九〇年の歩み」を受けもち、今年一二月号で二四回となります。『民藝』誌も毎月テーマが異なります。ラビア写真共、見応えがあります。たくみ、日本民藝館売店で販売しております。今回ご紹介の「民藝運動の作家と職人の仕事展」の品は、永年のお客様の蒐集品が中心で、なかなかの佳品と存じます。作家、民陶に関わらず明治、大正、昭和初期生まれの作者の品は、力強く、しかも釉薬の魅力に溢れています。お楽しみください。

(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四一二  
発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)